

## 長期保存封入剤を使用した髄液検査内部精度管理の取り組み

◎長嶋 和子<sup>1)</sup>、大澤 道子<sup>1)</sup>、佐藤 聖子<sup>1)</sup>、西井 智香子<sup>2)</sup>、杉浦 縁<sup>3)</sup>、星 雅人<sup>4)</sup>  
藤田医科大学病院<sup>1)</sup>、学校法人藤田学園 藤田医科大学岡崎医療センター<sup>2)</sup>、藤田学園 藤田医科大学ばんだね病院<sup>3)</sup>、藤田医科大学<sup>4)</sup>

【はじめに】近年、髄液検査は自動化が進み、技師間差や入力間違いの是正などに大きく貢献している。その反面、目視判定の機会は大幅に減少し、多くの技師が目視判定に不安を覚える状態となっている。現在まで当大学病院をはじめ、ばんだね病院、岡崎医療センターの三病院間で目合わせを行い精度の統一化を図っているが、計算盤に封入した検体は比較的早く乾いてしまうことや、細胞が計算盤内を転がるため運搬には不向きであった。

今回我々は星らが開発した尿沈渣長期保存封入剤を用い髄液細胞判定の多病院間の目合わせを行い、一定の知見を得たので報告する。

【方法】検体 100 $\mu$ L にサムソン液を 60 $\mu$ L 加え、混和後 10 分静置した。静置後、封入剤を 250 $\mu$ L 添加し、泡立てない様に混和した。細胞は封入剤より比重が軽いことから、時間の経過と共に浮上し固定されてしまうため、封入後は計算盤を反転させ 24 時間静置した。計算盤は 3 枚作製し、それぞれの病院へ運搬後一週間を目途に、総数 41 名の技師に対し細胞数算定と種別の鑑別を依頼した。

【結果】封入標本の外観は細かな気泡を認めたが計算盤の乾燥はほとんど認めず、一週間経過しても十分確認できる状態であった。細胞の染色態度に関して、多形核球は生標本と比較して染色直後から一週間後まで同等であった。一方、単核球は核の染色態度がやや弱く、時間の経過と共に細胞コントラストが低下した。三病院の細胞数算定技師間差に関しては概ね一致した結果となった。細胞種判別については、経験年数の少ない技師で核の分葉が中央に凝集した多形核球を単核球と捉える傾向が確認された。

【考察】サムソン液を添加した髄液検体では、一定期間安定的に保存することが可能であるが、多施設、多人数の精度管理等には十分な検体量が必要となる。本研究で使用した封入剤を用いることで、これら課題を解決できる可能性を見出した。すなわち、フォトサーベイ以外に不可能であった髄液検査の新しい目合わせとして活用できることが確認された。今後の課題として、計算盤に混入する気泡を除去する方法や、サムソン液の添加量や染色時間の検討などが必要である。（連絡先：0562-93-2300）